



発行人:村田宣男 編集人:行方正幸 TEL: 043-486-0239 Mail: yukuemnamekata@gmail.com

巻頭言：山の会の未来に向けて — 伝統から発展へ —

常数 英昭 (S49 年卒)

稻門山の会副代表の常数です。2025 年度末の役員退任に当たりましてお礼とご挨拶申し上げます。

2015 年のあるとき、山の会の 2 期下の倉本弘さんから「稻門山の会役員をお願いしたい」との電話を頂きました。2016 年の山の会 60 周年記念で T シャツを配布した少し前の頃です。それ以来約 10 年間役員を務めました。

その間の代表は上田訓央さん、井村英明さん、斎藤雄二さん、行方正幸さん、そして現代表の村田宣男さんです。役員になって、現役当時の方々と再び活動して、また現役当時は直接存じ上げなかった諸先輩方、後輩の方々と活動して張り合いと嬉しさを感じました。同期の後藤洋一郎さんにも役員になって頂きました。

役員会の主な活動は会員相互の親睦と、現役会員活動へのアドバイス、サポートです。役員会及び現役とのコーチ会をそれぞれ年 3~4 回開催しています。コロナ渦で OB/OG と現役との合同ハイキングが中断していましたが、2025 年に復活することができました。

私が現役の 1970 年代当時は、夜行急行アルプス号に乗るために、午後早くから新宿駅でキスリングで順番をとっていました。合宿中は当番が夜ラジ



—Contents—

巻頭言：常数英昭

特集 I : 山の会と本

吉田 稔

打矢之威

納見明徳

岡安喜久夫

濱田正則

行方正幸

高野啓介

廣瀬瞬一

深澤 徹

特集 II : 2025 年山の記録

上田・栗又 O B 追悼

O B 合宿報告

お知らせ・編集後記

才気象通報で天気図を作成して、それによってリーダーが「よし、明日は3-5」（3時起床、5時出発）と言ってからシュラフに入りました。携帯電話はなくパーティー内連絡はトランシーバーを使用し、山に入ったら下界とはほぼ連絡は取れませんでした。

今はデジタル機器の発達で天気図作図の必要はなく、GPS機器で位置確認もできます。しかし、天気図や国土地理院の紙地図によって、登山技術に必要な概念を理解することは意義があり、現役対象に机上学習として「登山教室」を開催しました。

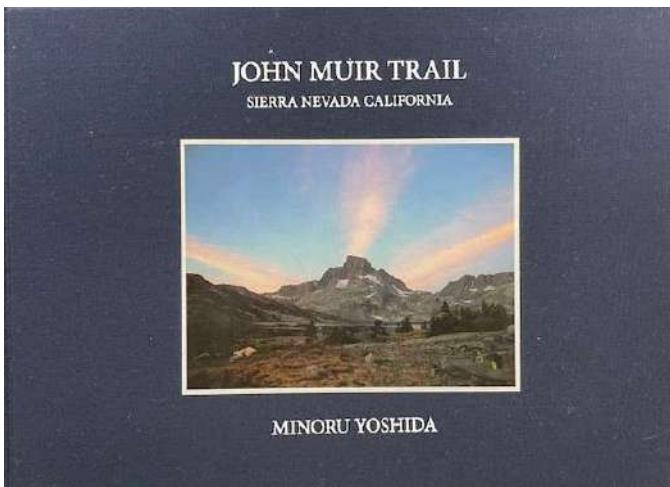
近年はハケ岳黒百合平をベースにOBが講師として現役の雪上訓練を実施していましたが、OBの高齢化等によって実施が難しくなり、民間登山スクールに費用を補助して現役が参加しています。

役員任期中の一番の重大事は2018年にOBの高野啓介さん、2019年に現役の利篠暢さんが山で遭難事故死されたことです。事故発生時にOBの方々に捜索、関係機関連絡等にご尽力頂いたことに感謝いたします。そして改めて高野さんと利篠さんのご冥福をお祈り申し上げます。

時代によって登山の形態等は変わりますが、これからも山の会の伝統を生かしつつ、Safety firstで山の会がますます発展していくことを願います。私も微力ながら今後も協力していきます。役員退任に当たってのご挨拶といたします。



(1) JHON MUIR TRAIL 吉田 稔 (S38年卒)



※ 購読希望の方は行方正幸 yukuemnamekata@gmail.com宛て連絡を

1962年、早稲田大学3年の7月から8月にかけてアメリカを一周したときの日記

28 July 1962、眠い眼をこすりながら外へ出た。

なんと緑の木々の上の素晴らしい光景が目に入った。

のけ反る様な高さに、そして目の前にスラブ状の垂直な壁が我々を取り巻いている。まるで火口の底にいるようだ。ヨセミテバレーの出入口は一箇所。車の数がすごい。所帯道具を一式揃えてやってくるらしい。

車の後ろに部屋になったワゴンがついている、話には聞いていたが。

食堂へ行く、カフェテリアという形式、ナイフ、スプーン・フォークとナプキンを大きな皿に載せて好きな食べ物を勝手に取っていく。

トータルはレジで計算してくれる、一通りで大体1ドル50セント、コーヒーはお代わり自由。

労賃が高いからこんなシステムが発達するんだろう。

車でグレイシャーポイントへ上る、標高約8,000フィート、前にシエラネバダ山塊、こんな規模の大きな連山は見た事がない。

同じ道を戻り、今度はビッグトリー(moname)へ。

杉だろうか。ものすごく太い杉が倒れていたり、火事にも焼け残って焦げあとを残して立っている。

成長しているのだ、そしてとうとう杉の間を自動車が通る。

川のほとりでを止めてファイアーフォールを見る、グレイシャーポイントから火を落とすのだ。

僅か2、3分だが実にきれい、山火事の心配で極度に神経質な人達が良くこんなことをするもんだ。

食事の時にビールを頼んだら、何歳かと訊かれる。

21歳以下には絶対に酒は売らないそうだ。バーには入れそうもない。

シガレットマシーンが面白い。パックで30セント、10.5.25セントのどの組み合わせでもよいから入れてボタンを押すと出て来る。

サンヨーキンバレー、樹木が一杯、牧場は見渡す限り、それでも柵がある。水が少ないせいか木も少なく草は枯れている。牧草にするやつは区画されてそこだけが緑になっており、噴水がでている。飛行場もある。農夫が種まきに使うためとか、以前隣人を訪ねるのに自動車を使うという話をきいたが、成程その通り。

帰りは海沿いの街サンタクルスを走る。途中遊技場で射的をする。22口径の実射、15発で25セント。



(2) 私の山登りと海外体験記 打矢之威(S37年卒)



はじめに

私は、東京都文京区目白台1-1-10番地の打矢家の5男に生まれました。打矢家は平将門の家来だったとの由。当時最新の武器である短槍の名手で、戦場を駆け廻り、馬上から至近距離で槍を投げて敵を次々と倒したので、主君から以後、打矢(当時”だや”と称した)と名乗れと命じられたとのこと。

靖国神社の就館にも当時の”だや”(打矢)が展示されています。

私には兄貴が4人います。早くから夫を亡くした若後家の母にしてみれば、私ことは関心事から遠く、まったく干渉されず、自由奔放に育ちました。

早稲田に入ったのも、妻を持ったのも全て自己責任で決めた次第です。学生時代は山登りに熱中し、教室にいるより山小屋やテントで寝ることが多く、「お前は商学部ではなく山岳部入学だ」と兄たちの鬱憤をかっていました。

従って成績は最低、貿易商に入ったのはひたすら外国に行きたかったのが理由です。学問はイマイチでしたが体は丈夫とアピールしたので、アフリカ、中近東要員として採用されました。

家を継ぐ必要もなく、親の関心も薄く、5男でB型、性格は大雑把、すべてなんとかなるさと楽天的、大らかで細かいことにこだわらない、白人女性が大好き人間です。

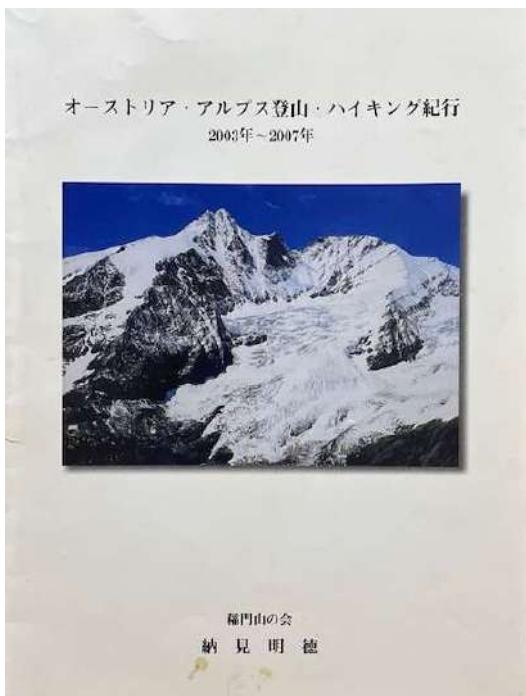
さて、学生時代の山登り、総合商社時代の海外駐在生活。40代後半サラリーマン生活を辞めて独立してから、いろいろ面白い目や、今考えるとゾーッとな体験を記録にまとめて子どもたちに残しておこうと考えた次第です。

令和3(2021)年9月

※ 購読希望の方は行方正幸 yukuemnamekata@gmail.com宛て連絡を



(3) オーストリア・アルプス登山ハイキング紀行



納見明徳 (S34 年卒)

納見 OB の巻頭言です。

東部アルプス、主としてチロル地方の山々を三年間、めぐり歩いてみた。

きっかけは海外事情に詳しい打矢君の先達で、彼のゼミ仲間に交じって、2004 年ウイーン、プラハ、ブタペストを旅行し、旅の終りにチロル州の首都インスブルックを訪れたことにあった。

南北の山に挟まれた広大な盆地の古都は故郷に帰ったくつろぎの気分を与えてくれた。打矢君は翌年 2005 年に山の会の仲間をウイーンに誘ってくれた。

三木君と私はチロルの山に興味を抱いていたので、ツアーの前半、ドナウ河ヴァッハウ渓谷の船旅に参加し、観光で名高い湖畔のザンクト・沃尔フガンクで皆と別れ、チロルに向かった。

チロルは東のザルツブルクから鉄道でインスブルックに至り、イン川に沿って、さらに西へ向かい、サンクトアントンを経てアールベルグ、スイスに通じている。

鉄道の南側に何本もの深い谷（タール）が並び、谷の奥がアルペン山域になっている。

2005 年、初めてチロル山塊に入り、レンタカーで山と氷河を尋ね回り、エツタールの最奥のフェント村にあるアットホームなガストホフが気に入って定宿に決めた。

一方、田野辺君は 2003 年から毎年、夏にドイツ語の習得のためドイツに短期留学し、帰路オーストリアに向かい、数週間チロルの山を単独で歩いている。

打矢パーティも 2004 年にオーストリアをハイキングしている。

オーストリア・アルプスには著名な山は少ないが、急峻な岩峰、雪を頂いた秀峰、白い帯びの雄大な氷河、麓には宝石をちりばめたように輝く湖沼や羊が草を食むアルムののどかな風景が素晴らしい。

そしてチロルの山々には中腹に整備された登山道があり、足下に群生のアルペンローゼ、一株で咲く華麗なエンツィアンを見ることが出来る。ただエーデルワイスは昨今は、いくら探しても見つけられない。

対岸の氷河やアルムを望みながら、半日も歩けば立派な山小屋が現れ、泊まることもできるし休憩してランチも採れる。

我々外国人でも簡単にオーストリア山岳会に入会が出来て、五百件もあるという山小屋に割引料金で宿泊が出来て、また色々な情報も得られる特典がある。

登山者やハイカーにはパラダイスである。

自分の年齢から考えて、もうハイキングで充分であるが、山屋の習性で頂上に立つ魅力が捨てき

れず2～3のピークを目指した。

残念ながらオーストリアの最高峰グロスグロックナー山は失敗した。

二番目に高く、そしてチロルの最高峰ヴィルトシュピッツェには登ることができた。

またハイキングの途中でイタリア国境の雲の上に望見できたシミラウン山はその姿と名前の可愛らしさに魅力を感じ、目標に選び登頂した。

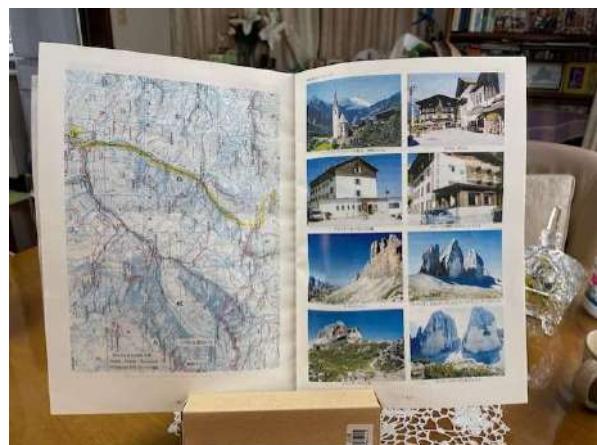
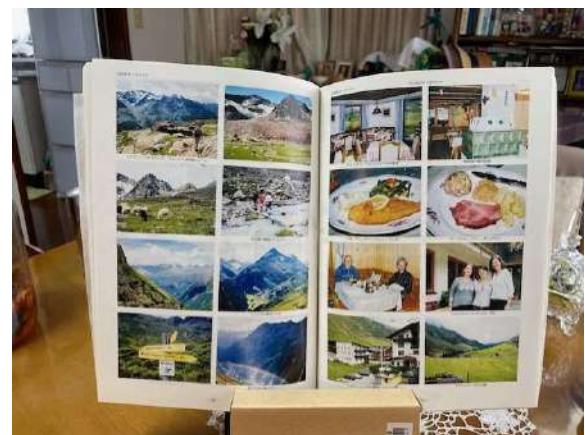
シミラウン山山頂には十字架のほかに珍しく表示板がありNEIGE MARTINとあった。

山から山への交通は2005年、2007年にはレンタカーを使い2006年の時には鉄道とポストバスを利用した。

レンタカーは機動性があるので2007年ドロミテのハイキングや南ドイツのツークシュピッツェ山に登った。

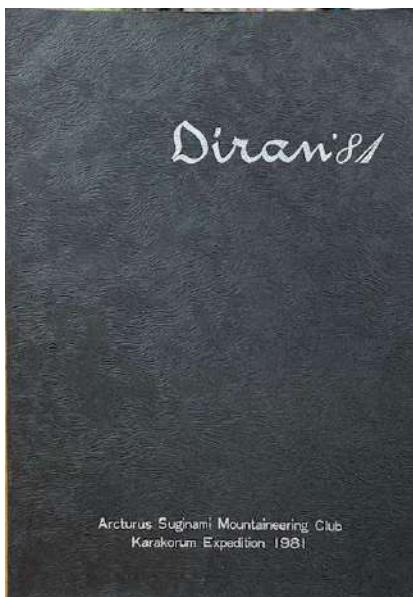
この小冊子の記録と情報から山の後輩達が、あの勇壮なグロスグロックナー山の登山を満喫し、また山小屋から山小屋へ彷徨の旅を楽しむものである。

2008年11月1日



※ 購読希望の方は行方正幸 yukuemnamekata@gmail.com宛て連絡を

(4) ディラン遠征 岡安喜久夫(S51 年卒)



Diran 発刊にあたって カラコルム遠征実行委員会 代表 川久保三男

今年の海外登山での死亡につながる遭難は 21 件 51 名(『岩と雪』85 号より)と最悪の事態を記録してしまった。この真っ只中に私たちの仲間が出発した。北稜という初登ルートをめざして……。私たち登山者の側が'81年冬山から地滑り的にはじまり、春、夏と続き、同時に進行していた海外でのそれを含めた大量遭難という厳粛な事実を直視し、真摯に受けとめ、さらにその本質を「鋭く、深く研究」しなければいけない時期にである。

だから、隊の到達点が 5,730m であるということの具体的な評価は差し置くとしてともかく全員が無事帰国できた事が何よりもうれしいというのが正直なところ本音である。

「疎外問題」も拡大されてきている。だから私たちが、自然を求め、人間性を回復したり、登山を通して自己の生へ、社会へ「自己主張」をするのは当然の事なのである。しかも重要なことは、この事は誰も止めることの出来ない必然性をもった社会現象として登場してきていることである。

だから、日々の仕事に追われている勤労者が、いわゆる「識者」のいう「ヒマラヤは特権的人間の領域である。」という意見、そしてそれに一般的に影響されている社会的風潮を真面目に受けとめつつも批判的にのりこえ、たとえ未経験者同志であっても、国内登山の積み上げの上に立って、「ヒマラヤへ、7,000m へ行こう」という発想を持つのもまた当然なのである。

私はそういった今日的な情勢を認識しつつ、遠征の実行委員長として準備段階から幾つかの問題に携わってきた。実行委員会は登山隊員とは違った角度からものを見ることが出来る立場にある。そういう意味でいえば遠征出発まで解決できない幾つかの問題があったと思っている。

第一に登山観の問題である。これは単に勤労者の立場に立った登山観とか安全登山を重視するとか、メンバーシップとパーティシップとか一言で片づけられるものでなく、もっとドロドロした、ピークそのものに対する執念とでもいうのか、そのことを含めた登山観の一致のこと

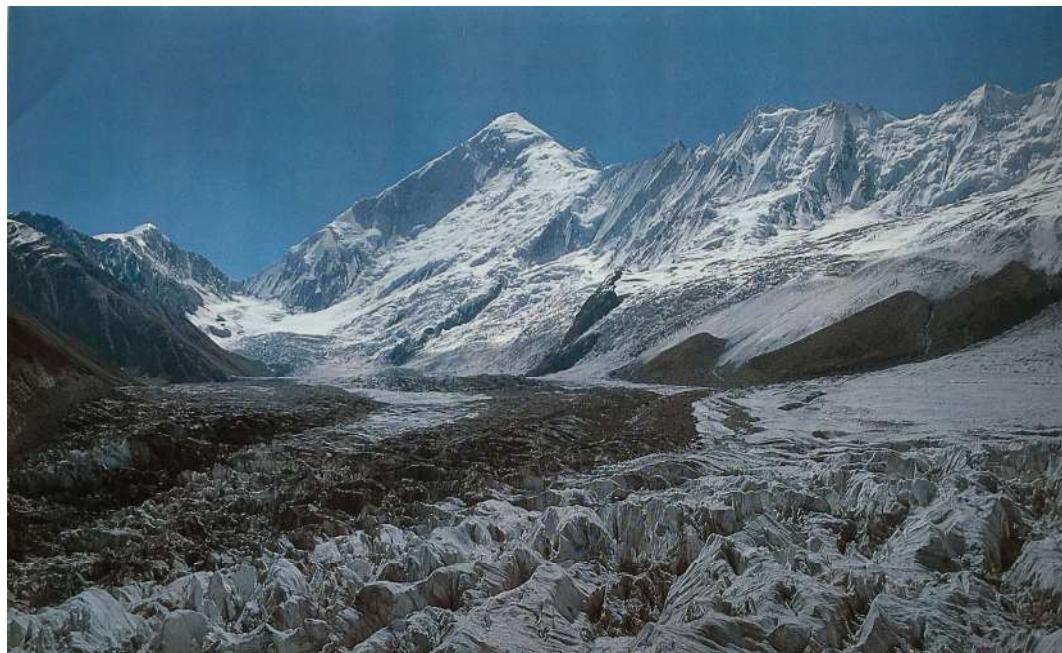
である。これがないとなかなか 7,000 メートル級の初登ルートは厳しいぞ、ということであった。私たちの現在の到達点ではとても難しい問題なのである。

第二は、送り出した山岳会の教育遭難対策委員会との関り方の問題である。国内の山行には、「遭対」がそれなりに機能をするが、海外遠征となると「行く人間の情熱」が先行してしまう。国内での山行に対しては時によっては厳しい位のチェックをしあうが、7,000 メートル級の山に対しては実はもっとトレーニングや山行内容の吟味、そしてメンバーへの科学的データー等を基礎にした適否の判断を「教育遭対」がすべきなのである。

何故、この事を強調するかと言えば、前述したように登山が必然性をもった社会現象として登場してきているということ。この傾向はますます拡大されていくと思うこと。そして海外遠征を含めたそれらの事に誰が責任を負うのかの問題として考えるからである。一部マスコミやいわゆる『識者』の遭難に対する批判の記事を見るが、このことで遭難が減少するとは断じて思えない。この延長上には「登山人口増大への嘆き」が待っているだけだと思うから。

小さな子供たち、障害者、年輩者を含め沢山の人々が山に行くことを歓迎しそれを「国民の権利」であると主張しているのは私たち勤労者山岳会だけである。この延長上にこそ勤労者の登山の未来が開けると思うのだが、海外遠征のようにハードな山行になると組織的な対応が出来ないというのでは、これは脆弱な山岳会では多面的登山要求を発展しきれないし、まして海外遠征を発展的にうけついでいくことなどできない。だから登山隊と送り出す山岳会の関係を強調したいのである。

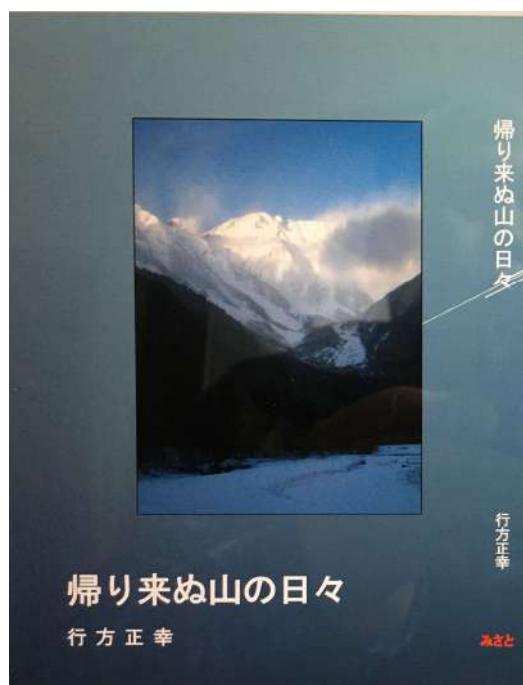
実行委員長として今回の遠征で強く感じた所は以上 2 点であるが、しかし、私たちは彼らに心からの拍手を送る。 杉並山の会もフルクトスもレベル的には“中級以下、”の山岳会であり、隊員はその山岳会の中で会運営に積極的に携わりつつ、この遠征を準備してきた。その「アルクトス・杉並山の会ディラン遠征隊」が私たちの現在の到達点を最高の形であらわしてくれたからである。



※ 購読希望の方は行方正幸 yukuemnamekata@gmail.com 宛て連絡を

(5) 帰り来ぬ山の日々

行方正幸(S50年卒)



2018年5月にクライミングジムの人工壁から転落して、背骨、腰骨、脚等に48個の金属を埋め込むという、死ぬ一歩手前の大怪我をした。その時に病院で書き溜めた、登攀の思い出をまとめた本である。(はじめに)

高校を卒業した時、私はひとりでGWに上高地から涸沢へ向かった。朝の涸沢ヒュッテからモルゲンロート(朝焼け)に燃える雪を纏った前穂高岳北尾根の姿に感動し、広大な涸沢の雪の斜面を登り、恐る恐るクサリや凍った梯子のある岩稜を登って奥穂高岳(3,192m)の頂上に立った。

その時に出会ってしまったのだ。雪と氷に包まれて聳える大魔神のようなジャンダルム(フランス語で憲兵:登山用語で主峰の前に聳える前衛峰の意)の姿に。それから奥穂高岳の山頂からみたジャンダルムのことが忘れられず、大学生になつたら漠然とアルプスに行きたいと思うようになっていた。

ジャンダルムの空の遥か向こうに、ピッケルを振ってマッターホルンやモンブランの氷壁を登る自分の姿が見えたのだ。雪の穂高に魅入られたのだ。



(6) 会報 神奈川RCC 赤い里斯 高野啓介(S51年卒)

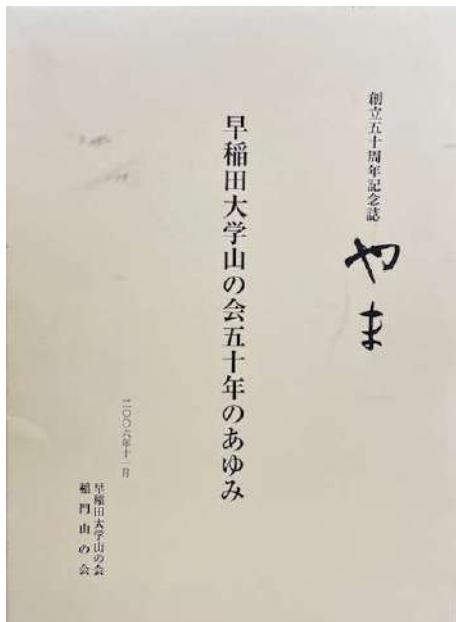


会員紹介

高野啓介 エリートの高野氏は仕方なしに諸君に合わせてくださっているのだぞ。対外的なことは彼を表面に出すべし。そうすれば、代表のハッタリも真実に近づく。彼と山以外の事も語り合わなければならない。神奈川の担任の先生のつもりでだ。

※ この2冊の会報は、高野啓介 OB (S51卒) が編集したものです。購読希望の方は行方正幸 yukuemnamekata@gmail.com 宛連絡を

(7) 早稲田大学山の会 50年史(早大学山の元会会長 濱田政則)



創立五十周年を迎えて

稻門山の会の卒業生の皆様および山の会の現役の諸君とともに、早稲田大学山の会の創立五十周年を慶びたいと思います。そして、半世紀にわたる我々の活動を支えて下さいました大学内外の多くの方々に心からのお礼を申し上げ、同時に活発な活動を続けてこられたOBと学生会員の方々に改めて敬意を表します。

さて、半世紀の歳月を重ねた山の会の歴史は、必ずしも平坦なものではありませんでした。多くの大学山岳部などが休部や廃部に追い込まれていった時代の趨勢に、山の会も無縁ではありませんでした。数年前には山の会の会員の急激な減少による活動の実質的な停止の状況を受け、大学学生課からの要請や先輩諸氏のご要望もあって会長を引き受けることになりました。

まず会長として実行させて頂いたことは、新学生会館完成に伴う新館への部室の獲得でありました。山の会や稻門山の会の輝かしく長い歴史が大学側にも高く評価され、部室を割当てて頂くことになりました。私が現役の頃の部室に比較すべくもないほど立派なもので、申し分のないスペースを獲得することが出来、山の会の歴史に新しいページが加えられました。

問題は会員数の確保でした。理工学部の私の研究室に所属する大学院生、学部生の山好きの者を山の会の会員として、年に数回の山行を行うことで会の存続を図って参りました。その後のねばり強い勧誘が功を奏して、一時期三十名に近い会員数になり一安心というところでしたが、最近になってまた会員数が減少する傾向が出ています。このことは他の山登り関連の学生のサークルにも共通して見られるようです。

山登りのような時間と体力が必要なことは避け、なるべく手軽なレジャーやスポーツを志向する現代の若者の気質が出ているように見えます。また、最近の学生は小さい頃から競争社会に生きて来たため、独立して行動する傾向が強く、組織を作つてそれを育てて行くのが苦手ということが影響しているのかもしれません。とは言うものの会員減少は会長としての私の責任でもあり、先輩諸氏との連携の上、現役会員の指導など出来る限りのことをしてゆきたいと考えています。

少し個人的な思いを書かせて頂きます。大学を卒業後、建設会社から大学へと職をかえて来ましたが、四年間の山登りで培われた体力や気力がその時々の自分を本当に支えてくれたと思っています。私の専門は地震防災工学ですが、阪神・淡路大震災では専門家としての自負と自信が完膚なきまでに打ち砕かれました。そんな状態から、日本や世界の地震災害軽減のために出来る限りのことはしようと再び立ち上がりてくれたのは学生の頃の山登りの経験であったと思います。

新人合宿で参加した八ヶ岳の全山縦走、パーティーの気持ちがばらばらになってしまった夏山合宿、滝谷での岩登り、池塘をめぐった岩手山から秋田駒ヶ岳の山行など、昨日のことのように記憶が蘇ります。特に思い出すのは積雪期の南アルプスの全山縦走でしたが、多くの仲間や先輩の支援があってはじめて実現出来たものです。それぞれの山行の苦しい経験や喜びが今までの人生を支えているように思います。

「山登りは人生そのものだ。一歩一歩前進しようと努力すれば、必ずやその努力は報われる。必ず高みに到達することが出来る。」と飲んだ勢いでよく学生に話をすることがあります。六〇歳を過ぎてもこの思いは変わることはありません。この二～三年は仕事の関係もあって山から全く離れてしまっています。時々大学帰りに山用品の専門店にぶらりと寄つて、何を購入するのではなく、山の愛好家でにぎわう店の雰囲気を密かに楽しんでいる程度です。山の会の会長職をお預かりしながら誠に申し訳のない状況ですが、近い将来、学生時代に登った懐かしいあの頂きや渓谷に現役の学生諸君とともに再び戻ることを、お約束して創立五十周年のご挨拶といたします。

(昭和 40 年度卒 早稲田大学名誉教授)

(8) 大分の超経済人～18人の道しるべ～ 廣瀬舜一 (S38年卒)



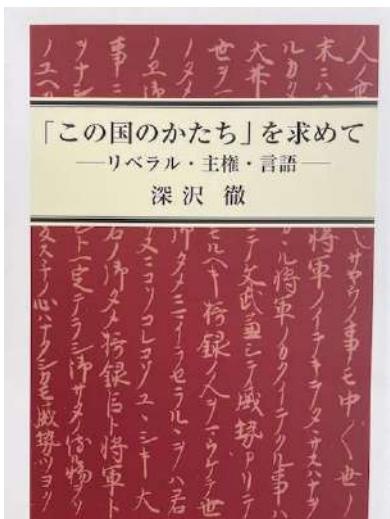
大分県の経済を支えた経営者 18人がその半生を語る！
 2021年5月に7回にわたり、大分大同新聞
 が廣瀬舜一 OB のインタビュー記事を掲載し、
 その内容がこの度、「MY HISTORY 大分の
 超経済人 18人の道しるべと：大分合同新聞
 社 GX 編集部。￥3,606」として書籍化され
 ました。



※ 購読希望の方は行方正幸 yukuemnamekata@gmail.com 宛て連絡を

(9) 「この国のかたち」を求めて

深澤徹 (S51年卒)



著者(深澤徹)のあとがきより

武蔵野書院からは昨年、リベラル・
 アーツの流れをくむところの「人文学」
 の可能性に賭けるといった意気込み
 の本を出版したばかりで、次は別のテ
 ーマでの本の出版を予定して、ぼつぼ
 つ原稿を書き始めていた矢先であつた。
 ロシアによるウクライナ侵攻という
 事態が出来て、これはどうしても、
 いま「本」にしておかねばならないとの

やむにやまれぬ思いにかられ、既発表のいくつかの文章を再構成するかたちで、急遽、本書を出版することとした。

これには前史があって、昨年来のベラルーシでの不正選挙や、香港での若者たちの民主化運動を、力づくでねじ伏せ、黙らせるような事態に大いに憤慨して、古典文学研究の必要を説くことが求められていたその編集意図からすれば、およそ場違いとしか言いようのない内容の依頼論文を書いたのである。(中略)だが状況はさらに悪化して、今般のロシアによるウクライナ侵攻が現実のものとなり、数百万人規模での大量の避難民が国を追われ、いまこのときにも国外への流出は続いている。私の頭のなかで、満蒙開拓団のたどった悲惨な運命と、それがフラッシュバックのように重なった。

※ 購読希望の方は行方正幸 yukuemnamekata@gmail.com 宛て連絡を

【特集Ⅱ：2025年山の記録】

(1) 三途の川 栗駒山 豊田紳二(S47年卒)

- ① 日程： 2025年8月5日（火）雨 一時 曇り
- ② 山域： 栗駒山(酢川岳) 1,626m (奥羽山脈)
- ③ メンバー： 金子治雄(81歳)、島田弘康(78歳)、豊田紳二(75歳) & 久子(年齢非公表) 計4名
- ④ コースタイム： 須川高原温泉 6:40 - 自然観察路分岐 7:03/7:08 - 苔花平 7:25
- 休憩 8:30/8:36 - 産沼 9:03 - 休憩 9:31/9:37 - 栗駒山頂上 10:22/10:31 -
休憩 10:42/10:50 - 産沼 11:36/11:47 - 休憩 12:45/12:47 - 休憩
13:07/13:10 - 自然観察路分岐 13:30/13:57 - 須川高原温泉 14:25

二月の稻門山の会総会・新年会の後、金子さんと島田さんと喫茶店で雑談中に何となく「夏には栗駒山」と三人が登っていない栗駒山に決める。島田さんに須川高原温泉の宿泊を手配して貰う。須川高原温泉に集合。



須川温泉で銳気を養う



余裕、余裕

完全武装の久子

出発時は小雨、久子だけ雨具上下で完全武装。ウグイスの鳴く名残ヶ原の木道を進む。豊田は植物に疎い。他の三人は小さな白い花の蘭や青色のリンドウの名前を確認している。雨が強くなり樹林帯で小休止、雨具を着る。萎える気力を奮い立たせ、励まし合いながら出発。花は終っているがイワカガミやシャクナゲが見られる。コケモモの実のほんのりとした甘味を楽しむ。栗駒山と笊森山の分岐にある産沼付近で雨に加えて雷鳴も遠くに轟くようになる。背の低い這松の樹林帯を行く。



名残ヶ原の湿原



シャクナゲや道松の樹林帯

沢状になった登山道 栗駒山頂上に着き、万歳三唱に続き三人で「早稻田の栄光」齊唱。

当初、下りは伝馬尾根経由で秣岳まで歩く予定をしていた。 時間的には余裕があるが、雨脚が更に強くなり雷も近づいてきているので来た道を引き返すことにする。 頂上から少し下った樹林帯で昼食。 相変わらず雷鳴が轟き、雨が強く、登山道には水が流れるようになる。



島田、久子 & 金子、栗駒山頂上にて



沢状になった登山道

雨具のズボンを着ていない下半身はズボン濡れ。 東京の猛暑に慣れた体には気持ちが良いくらい。 登りに渡渉した二つの沢の増水が気になる。 着いてみると案の定、増水で流れもかなり急になっている。 一番深いところで水は膝上まであり、途中で豊田がバランスを崩したが何とか持ちこたえて通過、続く金子さんもバランスを崩し、膝上まで水に浸かる。 自然観察路の案内地図を見ると、苦労して渡渉した川の名前は「三途の川」とのこと。 (記: 豊田紳二)



三途の川

(2) 屋久島宮之浦岳 木村亮英(M1年生)



屋久島 宮之浦岳

- ①日程 : 2025/08/10-12
- ②メンバー : 斎藤壮吳、海崎真穂、木村亮英
- ③天候 : 雨、雨のち晴、晴
- ④行動記録 : 8/10 紀元杉バス停 14:30 淀川登山口 15:15 淀川小屋 16:00
8/11 淀川避難小屋 07:00 宮之浦岳 09:45 高塚小屋 12:40 8/12 高塚小屋 05:40
楠川分れ 08:00 白谷雲水峡バス停 10:25

海崎さんが福岡で働いていること也有って、昨年の北海道クワウンナイ川遡行に続いて今年は屋久島の宮之浦岳登山が計画された。現役の学生は私（木村）だけとなってしまったが今年も集まることができてとてもうれしい。

9日。午後の便で斎藤さんと羽田から鹿児島空港へ。鹿児島港近くのゲストハウスで海崎さんと落ち合った。さっそく『集い処よっちゃん家』で飲みながら近況を話し合った。

10日。朝一の高速船トッピー&ロケットで屋久島、宮之浦へ。屋久島は洋上のアルプスといわれるだけあって、山岳が眼前に迫っている。平坦な種子島との比較が面白い。バスで安房に向かい、『山岳太郎』でお土産を買った。斎藤さんはモンベルご当地teeを買った。私も旅行のたびにモンベルteeを買うのだが、今回は宮之浦で海崎さんセレクトのノースフェイスご当地teeを買った。モンベルを買いすぎてもデートでモンベルを着ることはおすすめしません、今回の旅で得た最も有益なレッスンだった。『屋久どん』でうどんを食べてからバスで紀元杉へ。どんどん標高を上げていく。バス停の標高は1237m、淀川小屋は1385mだから今日はほとんど観光だ。大きな木、合体した奇妙な木を見上げながら小屋に着いた。テントを張ったが、どんどん雨が強くなる。テント泊は我々だけになった。



11日。雨はおさまったり強くなったりして、結局そこそこの雨の中撤収。雨の中宮之浦岳を目指した。登山道は水はけが悪かったり、あるいは沢のように水が流れたりと靴の中はすぐに浸水した（これは沢靴で来るのがよかつたか）。途中、ヤクザルやヤクジカに遭遇しながら、ガスの中、九州最高峰に登ることができた。新高塚小屋に着くころには雨はやみ、高塚小屋ではテントや衣類を干せた。しばらく休んで縄文杉を見に行くと貸し切りだった。数々の巨木を見てきたがこれは確かに。

12日。10:50のバスに乗るために早めに出発。朝の縄文杉を見つつ、ウィルソン株で休憩。これも貸し切りだった。トロッコ軌道に入るころには多くの人々とすれ違う。ガイドも多く、みな縄文杉を目指しているのだろう。辻峠では太鼓岩に寄り道するというので、へとへとだが頑張って登る。この山行で一番眺望がよく、来たかいがあった。帰りは楠川温泉で身を清めてからトッピーで鹿児島に戻った。鹿児島中央駅で海崎さんと別れ、我々は東京に。海崎さんも齋藤さんも明日から仕事だという。忙しい中、一緒に登山できたことに感謝している。（木村）

＜感想＞山の会に入ってから毎年恒例の8月山行、19年は海崎他山の会メンバーで鳳凰三山（ぎり9月だったか）、20年は1つ下の佐山と八ヶ岳縦走、21年は海崎・小田・櫛舎と槍ヶ岳、22年は海崎・櫛舎と塩見岳、23年は海崎と白馬唐松縦走、24年は海崎・木村とクワウンナイ沢、そして今年も海崎・木村と屋久島宮之浦岳へ。こんな風にならべてみて、もう山を始めて7年目になるのか、と驚いた。

屋久島は、雨は降れどもそこまで寒い思いはせず、美しい自然を堪能した。久しぶりにのんびりとした縦走で、前夜も山中も下山後もよくお酒を飲んだ。晴れていたら楽ちんすぎて物足りないようを感じたかもしれないが、雨が今回の旅のいいアクセントだった。屋久島らしさを感じるという点でもよかった。二日目の高塚小屋でのんびりテントや雨具を乾かしながら、焼酎を飲み、くだらない話をしたり、本を読んだり、縄文杉を見に行ったりする時間は本当に贅沢だった。次の計画を立てるのが、今から楽しみだ。（齋藤）

＜感想＞一度は訪れたいと思っていた屋久島に、昨年北海道はトムラウシ山（クワウンナイ川廻行）に行った齋藤、木村と行くことになった。気づけばほぼ日本の北端から南端。来年はどの端に行こうか、と旅が始まる前から思案した。

1日目は行動時間1時間ちょいで、雨に打たれたらしく記憶にない。登山客はバス1台分いたはずだが皆避難小屋でテントは我々のみだった。おっちゃんにめざしをもらい三岳をい



何も見えないけどそれもそれで



ただくなどし優雅な雨の夜を過ごした。

2日目も6時間くらいしか歩かない予定だったのでのんびり日の出後起きて出発。起きようとするたび雨音に心挫け若干寝坊したが6:30くらいには歩き出したと思う。相変わらずの雨で登山道が完全に浸水。沢靴で来るべきだったかと本気で思った。だが、山頂を踏み、屋久鹿、屋久猿などを見つつ13時にテント場に着いた頃には雨も上がっていた。まずは前日土砂降りの中活躍したテントを干し、徒步10分の縄文杉を見に行く。あまりにも立派な木々が多いため縄文杉を見てもあまり大きいと感じないのではないか?というは杞憂に終わり、しっかりと大きい縄文杉を見られた。(縄文杉はフェンスで囲われており近くまで行けなかった。ちなみに私はそこら辺に生えていたただのかい杉の方が感動したし好きだ。)縄文杉のところには我々しかいなかつたため長居したと思ったのだが、まだ早めの夜ご飯にも早いくらいの時間だ。のんびりと森を見ながらお喋りした午後はあまりにも平和だった。

3日目の下山道は日帰りの縄文杉の人々がたくさんいて山の私が好きな要素が無かったのと綺麗だと言っていた白谷雲水峡は普通に綺麗な沢くらいだったので、2日目の午後を超えることは無かったが、それでも総じて良かった。

3日間のんびり山行だった。それでも木々が桁違いに大きくてこれが原生林かと感じたり苔の深さに触れたり刺激的な時間だった。さて次はどこへ行こうか。(海崎)



☞ ウィルソン株でハートを探し出した斎藤と写真家・海崎

(3) 紅葉の立山と大日岳登山 村田宣男 (S53 年卒)



- 1) 日時：2025 年 10 月 08 日
- 2) メンバー：村田宣男
- 3) 行動記録： 室堂 (8:56) — 室堂乗越 (10:10) — 奥大日岳 (11:20~11:50)
— 室堂乗越 (12:40) — 室堂 (14:00)

猛暑が続いた今年の夏であったが、彼岸頃から順調に秋の気配が感じられるようになった。ここ一ヶ月程の気温の落差が大きく今年の紅葉は見事そうなので、久しぶりに秋の北アルプスに行くことにした。

北アルプスの紅葉と言えば涸沢か室堂と思い、私が前から登りたいと思っていた大日岳に行くことにした。東京からだと室堂への一番の近道は扇沢からアルペンルートを通って行く道のようなので、前日松本郊外に泊まり朝一番の黒部湖行バスに間も会うよう扇沢に到着する。平日ではあるが秋の観光シーズンで紅葉見物の客がたくさんいる。ケーブルカー、ロープウェイ、バスを乗り継いで 9 時前に室堂に到着。

天気予報は午後から天気が下り坂なので直ぐに出発する。登山開始とはいえ大日岳への道はまず雷鳥沢までの下り。雷鳥沢を渡ると本当の登りになる。付近の紅葉はきれいだがこの時点では 2400m 位から上はガスの中。1 時間程度で室堂乗越に到着し、稜線歩きになるが視界は全くなく、天候の悪化を心配して先を急ぐ。厳しい登りや危険箇所はなく、室堂から 2 時間半ほどで奥大日岳山頂に辿り着く。

2500mを超える著名な山のなかでは数少ない未踏の山だったので感動はあるが、残念ながら展望は全くなし。しばらく山頂で粘っていたが、ガスが晴れる期待は薄そうで山頂標識を撮影して帰路に着く。少し下ってくるとだんだんガスが薄くなってきて見通しが良くなる。標高が下がったからかと思ったが、次第に正面の立山の上部も見えてくる。そして室堂乗越まで帰ってくると青空も広がりだす。景色を見るために留まっていると天気はどんどん良くなり雲の合間から剣も少し顔を出す。

帰りのバスの時間もあるので余り長居はできなかつたが、紅葉の立山連峰の絶景を見ながらの楽しい下山になった。混雑を考えて最後の室堂への上り返しを急いだら結構息が切れた。しかし天気は更に良くなり、朝とは異なり、振り返って見る大日岳も全容がくっきり見えて満足。室堂からの帰りは大勢の観光客に交じってバス・ケーブルを乗り継ぎ、東京に着いたのは夜中になっていた。思えば立山連峰に来たのは旧人合宿で槍ヶ岳まで縦走した時以来50年ぶり。素晴らしい山行となつたが交通機関を含めると長い道のりで結構疲れた。

最近は今回を含め気ままに単独での登山を楽しんでいるが、昔の多くの仲間と登った記憶も懐かしい。現役の諸君にも楽しく美しい山の記憶をたくさん作ってほしいと思う。



No1 朝の雷鳥沢キャンプ場



No2 奥大日岳山頂



No3 室堂乗越付近からわずかに顔を見せる剣岳



No4 地獄谷と大日岳

追 悼

上田訓央(S33年卒)元代表と栗又功雄(S38年卒)OBを偲んで 宮野準治(S35年卒)

(1) 上田訓央先輩 (S33年卒) を偲んで

「ミヤノ、行くぞ。頼むジッヘル。（正式には「ジッヘルング」と言うが、我々は訳して「ジッヘル」と言っていた）」 昭和32年11月15日、上田先輩をトップに山口昌之（故人36年卒？）、私の3人は新雪の北穂東稜に一步を踏み出す。当時のザイル（今はロープという）は麻でできていて亜麻仁油をよく塗っていないと冬は堅くなり柔軟性が損なわれる。



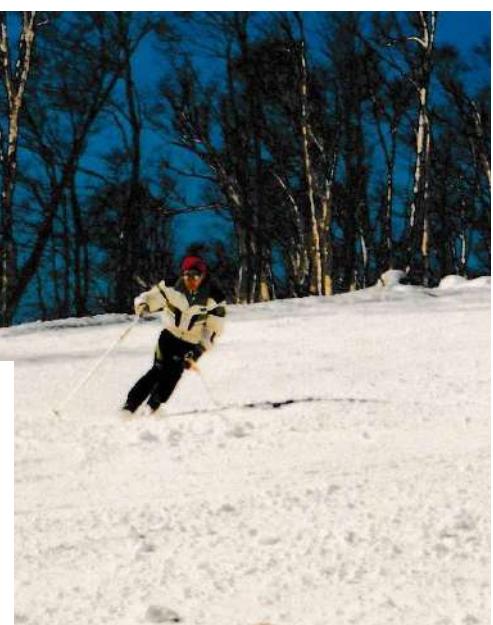
今でこそ東稜は初心者の岩登りのルートだが、当時、我々の経験・技量では雪の付いた東稜はまだまだかなり手ごわい相手だった。

岩登りだけに限ったことではないが、気心の知れあった仲間が2、3人で山登りをするときは、特にリーダーを定める必要はないし、自然とそれに類した地位に立つ者ができるはずである。上田先輩は常にその雰囲気をもっていた。

上に記載した新雪の東稜のときも決めることもなく上田先輩がリーダーになっていたし、山口も私もそれが当然だと考えていた。そして、この登攀もザイルの冷たさと一緒に思い出のものとなっている。

もうひとつ上田先輩の思い出として残っているのは、先輩が卒業してから冬の不帰岳の二峰を登り帰京して話してくれたことがある。「ミヤノ、下降は、雪面にコキジをうって凍るのを待ちアイスハーケンを打って、捨て縄をしてアップザイレンで降りてきた。」「本当ですか」。上田先輩はそうゆうユーモアのあるところも持ち合っていた。

その上田先輩とリーダーの役割について話したことがある。その結果、リーダーの役割、特に岩登りと雪山については「視」、「敢」、「慎」の観点をよくわきまえることが求められるということで一致した。上田先輩はそれを確実に実行した一人である。さらに加えれば「育」、つまり後輩をリーダーに育てることが求められる。合掌



パラレルの雄姿

(2) 栗又功雄 (S38 年卒) の思い出

栗又（愛称、クリ）の思い出は彼の画く山の絵からは離れられない。クリが日本山岳画協会の会員になったのは私の推薦がある。ある日新宿の小田急百貨店に行った時たまたま武井清氏の個展が開催されていて彼の作品に出会ってクリに紹介したのがきっかけとなった。

同協会の山岳画は単に山の風景を画くのではなく対象となった山の近くまで登って画くのが原則になっている。それゆえ山の会の画家であるクリにはぴったりの条件。彼とは何回も画風のことで話し合った。

私は印象派の画家セザンヌの画風（静物画なのに躍動感がある）が好きなのでクリにも山を書いてその絵からその山に登りたくなるような気持になるようなタッチで書いてほしいと話した。それには中川一郎の絵が参考になることも話をして一緒に湯河原の中川記念館にも観に行った。

クリと雪山に登ったのは気象部の雪上訓練のときだけだが熱い思い出になっている。彼の絵は私の家のデスクの上の壁に飾ってある。その絵を観るたびにクリを想い出す。クリ、もう少し頑張っていてほしかった。合掌



1959 年 5 月気象部 穂高合宿



屋久島 白谷雲水峡



雪の穂高岳(宮野 OB 所蔵)



14 年前 中ア千畳敷カール(金子 OB 撮影)

～2025年OB合宿～



「稻山会通信 51 号」でご案内した恒例のOB合宿は、松本でも最高の「旅館 金子館」本館を、館主の金子正嗣さんと若女将の御厚意により貸し切りました。どの旅行サイトをみても、超人気で予約取れない銘旅館です。初冬の松本で旅館・温泉・料理・珈琲を堪能してきました。

おかげさまで、13名の参加を頂きました。なんと、今回は3人の御婦人方の参加をいただきましたが、これまでずっと合宿に参加いただいた打矢OBが直前に誤嚥性肺炎になったのは残念であります。

合宿当日は懸念していた天候も回復して、松本市内や美ヶ原温泉の紅葉も真っ盛り。鄙びた温泉に浸かりまつたり。母屋の5部屋も全て借り上げて自分たちだけなので、暖炉が燃えるラウンジでコーヒーを飲みながら、庭園の庭の紅葉を見て時が流れるのを忘ることができます。

夕食は、廣瀬OBの乾杯で始まり、館主でシェフの金子さんの地元食材の料理を堪能、斎藤の元代表の挨拶、参加者の近況報告、大ビンゴは大盛り上がりで1等金子さん、2等関根さん、3等新井さん。2次会は夜中の24時まで学生時代のように、思い出話に花を咲かせました。

翌日は素晴らしい朝食を堪能してから解散。西に新雪の常念岳が顔を出していました。

[行方正幸記]

(1) 日 時： 2025年11月10日(月)～11日(火)

(2) 集合場所： 松本市バスターミナル

(3) 合宿所： ① 美ヶ原温泉 「旅館 金子館」

② 住 所 〒390-0221 松本市里山辺 131-2

③ 連絡先 ☎(金子館) 0263-32-1922

(4) 合宿参加者：

廣瀬舜一 (S38年卒) 山根一純 (廣瀬OB友人)

笠原 豈 (S40年卒) 笠原敏子(令夫人)

長谷川徹 (S41年卒) 関根宣子(準会員)

斎藤雄二 (S41年卒) 金子治雄 (S41年卒)

新井昭夫 (S46年卒) 行方正幸 (S50年卒)

柴原 至 (S52年卒)





旅館の前の4人衆



中庭の紅葉



さあ一喰うぞ！ 飲むぞ！



乾杯！①



乾杯！②



腹減ったなあ一朝飯だ！



館主の金宇正嗣さん

ラウンジの暖炉



美ヶ原高原から望む北アルプス(新井〇B撮影)

【お知らせ】

(1) 早稲田大学山の会(現役学生)の三役の交代について

2025年10月に早稲田大学山の会(学生の会)の三役が次のとおり交代いたしました。

【旧三役】幹事長：中山莞爾(3年) 副幹事長：齋藤優佳(3年) 会計：鬼塚一輝(3年)

【新三役】幹事長：篠田晴一(2年) 副幹事長：五十君駿(2年) 会計：丸田大翔(2年)

(2) 2026年総会・新年会の開催について

稻門山の会の総会・新年会については次のとおり、開催いたします。

① 日 時：2026年1月31日(土) 14:00～16:30

② 会 場：大隈会館 ☎ 03-5285-8878

つきましては、2026年1月17日(土)までに同封ハガキ又は稻門山の会事務局長米山不器のアドレス(fuki.yoneyama@things.jp.com)に出欠を明記の上お送りください。

【編集後記】

巨星墜つ。山の会の会員の皆さんに残念な報告があります。上田訓央(S33年卒)元代表がこの夏ご逝去されました。上田元代表は二度にわたり山の会の代表を務め、長きにわたり山の会の運営と学生の指導にご尽力されました。そういう私も、半世紀前に丹沢で行われた「山の安全祈願祭」やRCTや雪上訓練で、卓越した上田さんの登攀技術を仕込んでいた一人です。また、同じ時期に栗又功雄画伯(S38年卒)もご逝去され、会報の表紙は栗又OBの「剣岳」です。宮野準治OB(S35年卒)から追悼文をいただきました。お二人のご冥福を追い祈り致します。

稻山会通信第52号の巻頭言は、常数英昭(S49年卒)副代表です。常数さんは、これまで10年間もの長きに亘って稻門山の会の役員として現役の育成に取り組んできました。感謝、感謝。

特集Iは「山の会と本」で、これまで会員の皆さんから寄贈を頂いた書籍などを紹介いたします。OBの書籍から皆さんが実践してきた登山や人生を振り返ってみると、山の会の会員の多岐にわたり、文武両道で頑張って来たのが良く分かります。①吉田OB(S38年卒)の「JHON MURE TRAIL」、②打矢OB(S37年卒)の「私の山登りと海外体験記」、③納見OB(S34年卒)の「オーストリア・アルプス登山ハイキング紀行」、④岡安OB(S51年卒)「ディラン遠征」、⑥行方OB(S50年卒)「帰り来ぬ山の日々」、⑥高野OB(S51年卒)「会報 神奈川RCC 赤いリス」⑦濱田元会長「早稲田大学山の会50年史」、⑧廣瀬OB(S38年卒)の「大分の超経済人～18人の道しるべ～」、⑨深澤OB(S51年卒)の「この国のかたち」を求めて」いずれの本も貸出可能です。

特集IIは、「2025年夏の記録」で、栗駒山、宮之浦岳、大日岳。残念ながら最近はOBの山行も減り、現役からの投稿はありませんでした。その他コラムとして「2025年OB合宿の報告」があります。

次号から1回/年の発行にしたいと思います。これからも、稻山会通信では登山以外の会員の活躍も紹介していきますので、自薦他薦の投稿お待ちしております。 [行方正幸(S50卒)記]